

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

国際哲学研究の課題と可能性 諸々の生活世界を源泉にする哲学としての国際哲学

著者	山口 一郎
著者別名	Ichiro Yamaguchi
雑誌名	国際哲学研究
号	1
ページ	27-33
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005255/



国際哲学研究の課題と可能性

—諸々の生活世界を源泉にする哲学としての国際哲学—

山口 一郎

私たちの生きる現代にあって、国際哲学の研究の課題と可能性を問うとき、国際哲学が哲学である以上、今年3月11日に生じた「福島原発事故」を直接的、間接的に考察対象に組み込むことのできる哲学でなければならぬことは明かです。哲学研究は、社会的存在としての人間の生存の基盤が危機に瀕するとき、いかにいえば衣食住という文化の根底が覆される危機にあたって、当然のことながら、その研究の地盤も崩壊の危機に瀕していることを自覚するものでなければなりません。原発事故は人災です。地球温暖化も人災です。すべての公害、すべての戦争も含め、人間の為す行為から帰結するものです。このような生存の危機に直面する人間にとって、学問研究をも含め、人間の生存と行動全体を批判的に考察対象にすることのできる学問としての哲学の役割は、決定的に重要なものとなります。このとき、中心的課題の一つは、現代の技術文明を支えている自然科学研究の、社会的存在としての人間存在における適切な位置づけ、意味づけの問いです。生きる人間にとって、自然科学研究を基礎にする技術の活用は何を意味し、どのような枠組みで活用されるべきであるのか、この問いに、自然科学研究の方法論の射程を明確にすることなく答えることはできません。そして、この問いに答えることは、同時に、精神科学研究の方法論を明確にすることを意味し、諸学を統合しうる哲学の方法論を呈示できるのでなければなりません。このことを通して、自然と精神を包括して考察しうる現代哲学の主流である現象学の方法論を紹介し、自然科学研究一辺倒になっている現代文明の特質を明らかにすることで、これまで西洋哲学の受容をとおりて国際哲学であろうとしてきた日本における哲学研究及び、精神諸科学の研究成果の一端をとりあげることで、これからの国際哲学の課題と可能性を明確にしてみたいと思います。

1. 科学技術の本質を究明する哲学、自然科学の方法論の射程の確定

各時代を生きる人間存在の自覚としての哲学は、今日実現されている技術文明の本質、つまり、自然科学研究がどのように行われ、その成果がどのように活用されているのかをも考察対象にできるのでなければなりません。無論、人間の行動の全体を問う哲学者とはいっても、哲学者は自然科学研究そのものを行うわけではありません。しかし、原発の安全性が問題になり、「地震と津波の規模」について専門家から「想定外」という言葉が発せられるとき、「想定」そのものが自然科学者である人間がなす「人為」であること、つまり、想定するのは自然科学者であることをしっかり指摘し、いったい「どのように、想定しているのか」その方法を問いつめるのが哲学者に課せられた役割であると思われます。

哲学者は、自然科学者が想定するときの「過去のデータの取り方」、「統計処理の仕方」、「因果関係の確定の仕方」等々、自然科学研究の方法論の骨格とその射程を理解できるのでなければなりません。それだけではありません。自然を因果関係をとおりて解明するさい、つまり、実験と観察を繰り返すなかで、すべてのデータ収集の枠組みとして活用されているいわゆる主観的ではない「客観的時間と空間そのもの」とその客観性がどのように保証されているのかを問い詰めること、さらに、自然はすべて、客観的時空をとおりたデータ化が可能であるのかということも問われなければなりません。

そのさい、第一に言われねばならないのは、自然科学者が実験と観察において使用している「客観的時間と空間」とは、学習をとおりて知識として知られるようになり、他の人々と共に決めた約束事としての時間と空間であることです。それにたいして、私たちが直接体験する時間や空間は、「人を待つときの長い時間」であったり、

「あっという間の楽しい時間」であったり、「私の右は対峙するあなたの左」であるといった、それぞれの身体を中心にした空間の意味づけだったりして、時間は伸び縮みし、空間もそれぞれの身体の居場所から意味づけを受け取っているのです。まずは、いわゆる客観的時間空間と主観的に体験される時間と空間を対置させることで、自然科学の方法論の射程を問うてみましょう。

1) このような実生活における実体験の時間と空間と自然科学の使用する客観的時間と空間の理解の仕方の違いが最も鮮明になる事例をご紹介します。

昨今の発達心理学研究において、個々人を研究の出発点にする立場から、人と人との関係（たとえば、親子関係）を出発点にする研究上の立場と研究方法の変更が顕著にみられます。その代表者が、アメリカの発達心理学者で同時に幼児心理治療の医師でもある D.N. スターンです。そのスターンが強調するのは、幼児の発達において、親子の間に通い合う情動的な共有体験の重要性です。情動コミュニケーションが健全な発達の基盤であり、言語使用のコミュニケーションはそれを前提にしているというのです。この情動の通い合いをスターンは、両者間の「情動調律（ピアノの調律のようにぴったり一致することです）」と名づけます。幼児心理治療の医師でもあるスターンは、親子の間にこの情動調律がまったく欠ける無調律の場合、「（他の）人がそばにいる」という、あるいは、「人が人と共にいる」という人間存在そのものの実感をもてない人が育ってしまう危険さえ指摘しています。

ところが、驚くべきこととして、スターンが、母子の間の生きた情動交換がなされる共有される時間を科学的に、因果的に証明しようとするとき、この母親と赤ちゃんの間の「相互交流的同時性（interactinal synchrony）」について、追試による検証が成立しないとしてあえて、この見解を退けているのです。スターンは、一方で母子関係における情動調律、情動の一致体験の重要性を強調し、他方で、その情動調律は、正確に、客観的には同時に生じてはいないというのです。わたしがここで問題にしたいのは、「科学的には同時でない」というときの計測する機器をとおして表現される「数値による時間としての同時」の意味と情動が一致するというときの「実体験における同時」の意味の違いです。自然科学の使用する客観的時間は、時間軸上に0点の右に $+t$ 、左に $-t$ といったふうに時間点の連続として表現されます。0点の右側が未来、左側が過去とされるわけです。この時間軸で母親と赤ちゃんの脳の部位の活性化を計測し、特定の刺激に反応する活性化の時刻がたとえば、0.25秒ずれているとすれば、それは「本当に同時ではない」とみなすわけです。0点の現在がぴったり重なって初めて同時といえるわけです。しかし、情動調律が生じるとき、たとえば、乳児が始めて眼にする、自分に向ってくるおもちゃのロボットにとまどい、母親の表情に適切な対応の仕方を読みとろうとするとき、その母親の表情に表現された情動が直接伝わってくる（両者の間の情動調律が成立する）のですが、その一致するときの同時性にたいして、「数値の同時性」は一体何を意味しうるといのでしょうか。情動をそのとき共有できるから、赤ちゃんは、それに応じた適切な行動につながります。母親との情動調律の同時性こそ、生きていく赤ちゃんにとって大切なものではありません。他方、自然科学は、0点が重ならないのでどちらかが過去になっているはず、とでもいいたいのでしょうか。では、数値上、いつ過去は過去になるのでしょうか。0.1秒後、いや、0.05秒後、0.025、0.0125、・・・と区切っていって、無限にきりきれず、決して0時点に到達できない以上、過去はいつ始まるか、時間点上に表現できるはずありません。

こうして、過去がさだまらず、未来も定まらず、現在も時間点によって定まることがないとき、いったい時間軸上の時間点は、「同時」だとか、「過去」とか「未来」とかいった、時間の前後関係の意味をどこからもってきて、特定の時間点にあてはめているのでしょうか。いわゆる客観的時間と空間によって計測される物理量の世界には、「今や、過去や未来」という時間経過の意味が存在しないだけでなく、「上下、左右、前後」の空間の意味も存在しません。意味を与えているのは、あくまでも、人間の主観です。しかし他方、人間の主観は、起こる出来事の前後関係を勝手に決めて、「過去、現在、未来」の意味を与えているのでもありません。「覆水盆に返らず」というように、過去になったものは、過去になったのであり、このことに「未来」という意味を与えることはできません。

他方、そのような意味を与える人間の生存にとって脅威となっているのが、感覚することのできない、「何ミリシーベルト」とか「何マイクロシーベルト」とか、数値で表現される放射線量です。しかし、時間と空間と同様、この数値が意味をもつのは、世界に意味を与える生命体の生存、生死に直接影響を与えるからこそです。しかし、

この場合も、物理量の世界そのものがいかなる意味をもっていないことに違いはありません。数値で表現される物理量の世界と、物理量の世界に意味づけをしている生命の世界との区別は、根本的に重要な区別なのです。

2) 客観的時間と空間を使用して実験と観察をくりかえす自然科学の方法論の射程が露呈される他の事例があります。皮肉なことに、現代最もさかんに言及されている現代脳科学研究の最も重要な研究成果においてその射程が露呈されてくるのです。この研究成果とは、B. リベットの「意識の 0.5 秒の遅延説」といわれる発見です。

その要旨を述べれば、①意識は意識にのぼらない脳内活動の 0.5 秒の時間持続の後に生じる②「私たちの現実との同時性の体験は、人間の主観が 0.5 秒後、外からの感覚刺激の始まりに認められる大脳皮質の初期 EP 反応（刺激が皮質に至る 0.03 秒後の電気反応）に遡ることで成立する」③「人間の意識の自由は、意識的行動が実行に移される 0.1 から 0.2 秒前に（つまり、無意識の脳内活動がはじまって、0.3 から 0.4 秒後）その行動を意識的に拒否することのできる能力によって保証される」というものです。

この①の「意識の 0.5 秒の遅延」は、多くの脳科学者の迫試により、その客観性が検証されています。意識が生じるために本当に 0.5 秒かかるのです。②の「初期 EP 反応に遡るとされる主観的時間遡及」と③の「意識の自由を保証する拒否の意識」の主張には、多くの批判がみられます。私がここで問題にしたいのは、リベットが、②と③において、西洋近代哲学の理論理性と実践理性に含まれる諸前提とその限界を自覚できていないということです。その前提と限界とは、理論哲学上の「主観と客観」という認識論上の二元的対立図式であり、実践哲学上の「意識の自由と自然の因果」という実践理性に関する二元的対立図式です。

- a) ここで「主観と客観」というのは、他でもないリベットが「客観的に 0.5 秒後に、ほぼ 0.5 秒前の初期 EP 反応に主観が遡る」というときの主観と客観です。この主観が初期 EP 反応に遡ることで意識が成立し、そこで意識される意識内容とは 0.5 秒の間で無意識に生じている脳内活動の結果（客観的事実）に他なりません。ということは、主観は持続時間という形式をとおして意識を実現し、無意識の脳内活動という客観を意識内容として照らし出すという、形式としての意識主観、内容としての脳内活動としての客観という認識論的構図を主張することになります。この主観に属する形式としての働き（作用）と客観の側の内容という認識図式は、アリストテレスの形式（モルフェー）と素材（ヒュレー）、デカルトの心と物の二元論、カントの主観の形式的アプリアリと触発する物自体という構図をへて、リベットの③の「拒否の意識の自由」という主張につながっていきます。
- b) 拒否の意識も意識である以上、その意識が活動するためには、0.5 秒の時間持続が必要とされるはずですが、リベットは、拒否の意識だけは例外であり、0.5 秒は必要とされないとします。この原理的な非一貫性は別にして、どうして、自由の意識は、いわゆる客観的時間軸上の時間点に位置づけられなければならないのでしょうか。それは、因果関係が時間軸上の時間点の前後関係をとおして規定され、0.5 秒の時間持続における無意識の脳内活動が自然の活動として当の因果関係によって決定されてしまう、いわゆる決定論に陥ると考えられるからです。こうして、この無意識の脳内活動が因果的に決定される以上、この時間軸上の因果的経過になんらかの介入がなされなければならない、それが、それそのものが時間持続を必要としない拒否の意識であるとされるのです。しかし、下記にみられるように、意識の自由は、自然の因果による決定論との対置を通してしか保証されないのではありません。意識の本質は、「自然の因果か意識の自由か」、「意識の主観か、事実の客観か」という選択肢において理解することはできないのです。

2. 諸々の「生活世界」から生成する国際哲学研究

1) 意識と無意識の新たな理解の仕方：志向性による二元的思考図式の克復

① 脳科学者リベットの考える「意識」は、主観が初期 EP 反応に遡ることで成立する形式的原理として意識であるといえます。この意識主観が、無意識の脳内活動を照らし出すことで、客観としての意識内容を意識しているといえるのです。これにたいして、フッサール現象学の指し示す「意識」は、この「主観と客観」という対立と、「形式と内容」という二元的対立を初めから乗り越えていることにその本質があるとされます。意識は、いつも何かを意識していることとして成立しており、いつも、何らかの内容を意識してしまっているのが、意識の

本質であり、いいかえれば、いつもすでに、主観と客観の間において関係づけが終了してしまっている、架橋されてしまっているということです。この何かに向かって関係づけられ、意味づけしてしまっていることを、意識はその本質として「志向性」をもつといいます。そして志向性は、いつも世界に向かって超えていつてしまっていることから、「超越する」ともいわれ、その超え方をめぐる分析が、「超越論的分析」といわれます。しかも、そのさまざまな超え方、ないし、関係づけの仕方そのものとしての意識の働き方は、まさにそれが働くその只中で、そのまま意識されているのです。この意識の働き方をそのまま意識できる、自覚ともいえる意識を、それより先に辿ることのできない「原意識」、映っている原意識と呼びます。

- ② これを具体例で示してみれば、私たちは、随意運動と不随意運動の区別を日常生活で常につけています。故意の動きか、動きが先に起こってしまったのかの区別です。意図的な意識した運動と、地震のときのような身体が動かされるとき「運動の起こり」が先になることははっきり区別されています。随意運動の場合、自分で身体を動かしていることは、自覚され、原意識されています。それにたいして、不随意運動の場合、運動が先におこるとき、意識はその運動の後に続くのであり、運動が起こったときには、その運動ははまだ意識されていません。しかし、意識されずとも、その「運動の起こり」が先に残るのでなければ、先に運動が起こったと違いに気づくことはできません。ということは、意識せずに、「運動の起こり」を「運動の起こり」として残しておく働きがあるのでなければなりません。その働きを意識以前の、あるいは、広い意味での無意識の「過去把持（過ぎ去るものが残る働き）」と呼ぶことができます。しかも、無意識ながら、「動きを動きとして」残しているのですから、「運動という意味」を与えていることから、「志向性」をもつとされます。しかも意識にのぼる以前に働き、その働きが後に受け止められるという意味で「受動的志向性」と呼ばれます。それにたいして、随意運動の場合のように、意識して動かす、意識された状態で働く志向性を「能動的志向性」と呼びます。能動的志向性の特徴は、それが働くとき、その只中で、その働いていることが自覚されている、原意識されているということです。
- ③ ここで、随意運動で自分の運動が原意識されている場合の過去把持と区別されて、無意識に働く受動的志向性としての過去把持が呈示されていることは、大変重要なことです。というのも、リベットが述べる、0.5秒続く無意識の脳内活動は、フッサール現象学において、決して自然の因果関係として規定されるのではなく、運動感覚が受動的志向性として過去把持をとおして意識以前に前もって作り上げられる（先構成といわれます）プロセスなのであり、因果律によって決定論的に規定されているのではないことが、原意識の必当然的明証性にあたえられ、論証されているからです。したがって、この段階において、自然の因果と意識の自由の対立は、いまだ成立していません。受動的志向性は無意識でも志向性ですので、因果関係と規定することはできず、「動機づけ、意味づけ」として働いています。また、意識にはのぼっていませんので、比較したり、判断したりする意識の自由な活動の次元と同一化することはできません。ということは、「自然の因果か意識の自由か」という二者択一、二元対立以前の領域において、生命の動機づけとして働く受動的志向性の働く領域が開示され、確定されているといえるのです。
- ④ しかも、受動的志向性としての無意識の過去把持に残っていくのは、ただ単に運動感覚だけではありません。「ふと静かになったと思ったら、クーラーが点いていたことに気づいた」という場合、ことさら意識の注意が向かうことなく、気づかずに「クーラーの音」を聞き続け、過去把持されて残っていたことは明らかです。そうでなければ、もはや聞こえないクーラーの音とのコントラストは生じず、音の変化に気づけないからです。また、読書に夢中になっていて、「ふと気づくと、周りが暗くなり、足元が冷えてきていた」といった場合、「明るさと温かさ」が意識にのぼることなく過去把持されていたからこそ、その過去把持されていた明るさとのコントラストで暗くなったという視覚上の変化に気づき、無意識に過去把持されていた「温かさ」とのコントラストで「冷たくなった」という体感上の変化に気づけるのだからです。それだけではありません。生きていく上で、意識にのぼることなく、未来を先取りしていることは、すでに感覚の次元で生じていることです。たとえば、「考え事をしながら歩くとき」、路面の凹凸に気づかずに転びそうになることがあります。このとき、そもそも転びそうになるのは、前もって凹凸がないこと、つまり平坦さに意識の注意を向けることなく予測して一歩を出していたからこそ、気づかなかった凹凸に躓いてしまったのです。この無意識の予測は、未来の先取りとして、フッサー

ル現象学で「未来予持」と呼ばれます。こうして、すべての感覚には、いつも無意識に働く過去把持と未来予持がその背景において働いているのです。ということは、感覚や感情などの感性の領域は、受動的志向性をとおして成立しており、「物（自然）の因果と心（意識）の自由」という二元的対立図式以前に生じているといわれねばならないのです。

2) 感性の受動性と知性の能動性という二重構造からなる生活世界

- ① 無意識に働く過去把持や未来予持が受動的志向性として働くことで感覚の持続と変化が成立しています。この感覚の無意識の過去把持と未来予持は、上に述べた変化の場合の「コントラスト（対照）」と持続の場合の「類似性」という「連合」の規則性によって、「受動的綜合」として感性の領域に生じているとされます。「連合とか受動的綜合」といっても、別に難しいことをいっているわけではありません。先に発達心理学研究でスターンの述べる母子間に無意識に生じる「情動調律」や「間情動性」の生じ方が、連合や受動的綜合とよばれるのです。なぜ、このような用語が使用されなければならないのかといえば、母子関係にしろ、成人間の人間関係にしろ、哲学研究には、すべての学問の方法論を批判的に考察しうる、デカルトにならった「方法的懐疑」を経ていることが要求されるからです。他者の意識（無意識も含め）の明証性をめぐる哲学の探究（相互主観性論、間主観性論といわれます）の厳密さに比べ、最も最先端といわれる脳科学研究の成果とされる、他者の行動を写し取るとされる「ミラーニューロン」の発見にしろ、スターンの母子関係における「間情動性」の議論にしろ、批判的考察に耐えがたい方法論的素朴性は明白なのです。これら自然科学の方法論に無自覚な諸研究方向に、人間の社会生活における行動全体の舞台といえる「情動的コミュニケーション」と「言語的コミュニケーション」の基礎論を託すことはできません。
- ② フッサールは1936年に発刊された『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の中で、ヨーロッパの諸学問の危機を、ガリレイにより導入された、私たちの日常生活（現象学では、生活世界（Lebenswelt）と呼ばれます）の「数学化」にあるとみています。数学化とは、すべての自然現象を数を通して計測し、自然法則を導き出し、それを自然現象にあてはめるだけでなく、人間の生の全体に当てはめようとすることです。神経科学の代表者ラマチャンドロンによって最近10年の神経科学の最も重要な発見の一つとされる「ミラーニューロン説」では、他者の行動の意図が分かると同時に、他者の行動と自分の行動の区別は、各自のミラーニューロンの発火率の違いにあるということです。他の人がリンゴをもちで食べるのを見て何をしているのか分かると同時に、自分がリンゴをもちで食べる時には、他の人の場合より、自分のミラーニューロンの発火率の方が高い、数の違いにあるということです。もはや話題にのぼることなくなった「嘘発見器」の再来です。他方、このような数量の違いに無頓着、無関係な意識の明証性の領域において、各自に疑いなく与えられている「随意運動」と「不随意運動」との区別が原意識にあたえられています。「自他の身体の区別の意識」も「運動感覚」の有無で明確に原意識されています。そして、運動感覚を含めすべての感覚の感覚質（クオリア）が量の規則性から導き出せないとしているのは、当の脳科学研究そのものの主張であることを忘れてはなりません。
- ③ フッサールは生活世界の数学化にたいして、感性と知性の全体を生きる人間の復権を唱え、自然科学研究を統合しうる「超越論的現象学」という哲学研究の方向性を明確にしています。そこで特徴的なことは、「生活世界」を生きる人間の生き方を基本的諸態度の違いにみていることにあります。日常生活を、特に生活の仕組みや成り立ちについての反省を踏まえることなくそのまま生きていく態度を「自然な態度」、自然科学の世界観に準じて生きる態度を「自然主義的態度」、社会の構成員として互いを人格と認めて生きる態度を「人格主義的態度」と呼び、それらの諸態度の本質と生成について哲学として考察を進める態度を「超越論的態度」と呼んでいます。この超越論的態度において、自然主義的態度がその自然科学研究においてどのような方法論を前提にしているのかが明らかにされ、また、人格主義的態度が社会において遂行されうるための様々な社会制度上の条件が解明されうるといえます。技術文明による技術文明の危機に直面している人間にとって、これら諸々の態度による生活そのものを可能にしている「生活世界」の確保が肝要であるといえます。それには、人格主義的態度が実現されうる社会制度における自然科学研究の適切な位置づけが、諸学問を方法論的に統合しうる超越論的態度において確定されるのでなければなりません。

3) 日本における国際哲学の課題と可能性

- ① 人格主義的態度の本質には、人間が感性と知性を兼ね備えた全体として、人間関係においてのみ生存していることの自覚が属します。直接的な「情動的コミュニケーション」と言葉を介した「言語的コミュニケーション」による人間関係は、それぞれの社会制度においてその源泉と基礎をもっています。社会制度における自然科学研究の位置づけにあたって、ここで言われている人格主義的態度についての考察の必要性が切迫した課題としてはっきり示されたのは、本年3月に生じた原発事故という人災をとおしてです。私は、どこで作られていた電気であるかの明確の自覚もなく、自然科学者の安全基準という想定の内容に無関心のまま、そして政府の総合的エネルギー政策に無頓着のまま、ただただ電力を消費していた自分に、いたたまれない憤りを感じました。パソコンが使えれば、停電しなければそれでよかったのです。一方、放射能汚染の問題やこれまでの公害訴訟などにみられる第一の判断基準は経済合理性、経済効率性です。要は金です。財政です。GDPの増加です。戦後、経済成長期の頃、日本人が「エコノミックアニマル」と言われ始めました。哲学を勉強していた私は、自分のこととはとても思えませんでした。が、やっぱり自分のことと目をさましたのが、ドイツからもどって日本の大学で仕事を始めてからでした。学生のころ、森有正の著作で「日本人が人格ということを理解するまで、100年はかかるだろう」ということとか、当時の日本を訪れたフランス人女性が東京人の生活に接し「三番目の原爆が落ちるのはやはり日本だろう」という言及に触れていたことの現実味が、日々痛切に感じられます。
- ② 公共工事にともなう公害問題の解決にあたって、さまざまな委員会や当事者間の話し合いなどの司会者や議長役を担ってきた哲学者、桑子敏雄氏と水俣病公害訴訟に長年に渡り関わってきた哲学者丸山徳次氏が共通に指摘することがあります。日本社会において、民主主義の根本原則とされる三権分立（立法、行政、司法の独立）が機能していないというのです。また、自然科学研究の探求課題である因果性の研究が「因果関係が確定できない」という決まり文句で、お雇い学者の方便に使われているという現実です。ドイツにおいて、因果関係が解明されなくても、実害が出ている場合は、その解明をまつ以前に、予防措置がとられるという法的拘束（1970年代に、環境法・環境政策の基本原則として提出された予防原則としての事前配慮原則（Vorsorgeprinzip））とは大違いです。また、当事者間の利害が衝突するときに求められる「話し合い」を通したいいわゆる「合意形成」とは、実は反対する人がもはや「話し合い」に出なくなり、賛成者だけ残るようになった、賛成者同士の合意に他ならないというのです。話し合いに出なくなる理由は、簡単にいえば、精神的抑圧です。抑圧の手法は、手の込んだものであり、お雇い学者の専門的知識による「因果関係が認められない」であったり、「因果関係の考察の拒否（いわゆる想定に持ち込まない、想定外の設定）」であったり、行政しやすいように立法し、司法での合理性が約束されている行政合理性であったり、賛成者を擁立し、架空の対立抗争をあおり（いわゆる「やらせ」）、公共の利益を名目に、地域に根付いた人々の中の「情動的コミュニケーション」の根を断つこと、つまり、言葉になりにくい個々人の「心の痛み」を「当事者のエゴ」として封じ込め、抑圧することであったりするのです。私の知人に、市役所に勤める中堅の行政担当者がいて、行政に携わる人々のほとんどは、この抑圧の機構を熟知しており、日々の仕事で良心の呵責に苛まされているというのです。しかし、内部からの改革はできないので、（家族とともに生きなければなりません）、外から批判してくれと頼まれるのです。日本において感性と知性の全体を生きる人格主義的態度の遂行がいかに難しいのが、ここに明確に示されています。
- ③ さて、振りかえって、日本の明治期以来、哲学研究は常に国際哲学研究でした。西洋哲学研究が中心に据えられた哲学研究は、諸外国の哲学の研究としてはじまり、諸外国の哲学研究を進める中で、自国における感じ方考え方の特徴が明らかになるという経過を経る場合が多かったようです。その際、重要であり続けているのが、その国の言葉に習熟し、その国の言語的コミュニケーションだけでなく、その基盤として働く情動的コミュニケーションを生きる経験を重ねることです。

西洋の哲学を受容する中で、その受容の仕方に自国の伝統文化を再確認することになった典型的事例として西田幾多郎の「主客未分」とされる「純粹経験」の哲学を挙げることができます。私の考えでは、この純粹経験は対話哲学の代表者 M. ブーバーのいう「我－汝－関係」に他ならず、西田の「場」の概念は、ブーバーのいう「間（das Zwischen）」の概念に対応しようと思います。この対応関係は、ただの直観ではありません。それはフッサールの自他の主観の根源的同一性と差異の成り立ちを問う「相互主観性論」をめぐる哲学的探究を通し

て、つまり、「相互主観性論」における「人格主義的態度」の解明をとおして、より厳密な認識論的、倫理学的分析において論証可能になったものです。それによれば、西田の純粹経験の内実は、「我を忘れて物事に没頭する」とする「我－汝－関係」とその本質を共有するのですが、純粹経験の場合、森有正の指摘にあるように、ブーバーの「我－汝－関係」の前提になる「我－それ－関係」を経ることがない、「我－それ－関係」が背景に退き、軽視されるという特質をあげねばなりません。「我－それ－関係」とは、徹底した第三人称の世界、客観的観測に徹する態度です。実態調査のさいの第三者機関というときの三人称です。一人称と二人称の間関係は、親子関係がその基本ですので、情動がそのまま入ってくることは当然のことといえます。「タテ社会（親分－子分関係）」（中根千枝）、「甘え」（土居健郎）、「二項関係（私とはあなたにとってのあなたに他ならない）」（森有正）といった学問研究の見解は、諸外国の文化との接触をとおしてみえてきた「自国の文化の自覚」の痕跡といえます。社会制度は「我－それ－関係」を基軸にしてのみ正当に構築されうるので。

他方、日本の「物づくり文化」の真髄は、西田の「主客未分」の純粹経験に最も明確に表現されているとする産業界からの声も聞こえます。（『マエカワはなぜ「跳ぶ」のか、共同体・場所・棲み分け・ものづくり哲学』前川正雄）しかし、純粹経験の場が確保されうような社会作り、―― 福島汚染ホットスポット地域のお寺で座禅の修行はできません ―― 物づくりに徹することができるような社会制度の確立こそ、これまで諸外国の哲学に開かれた国際哲学を遂行するなかで明確になってきた、日本におけるこれからの国際哲学の最重要課題であり、まさに、諸外国の生活世界の成り立ちから学びうる国際哲学の可能性が試されているといえるのです。

ま と め

ここまで考えてきたこれからの国際哲学の課題と可能性として、二つの点を強調しておきたいと思います。

- ① 哲学は、自然科学の方法論の射程を見極め、特定の自然科学研究領域内部で、データの解釈上の相違や対立が生じるとき、その論争を仲介して、その専門領域の適切な研究方向の示唆さえ可能とするものです。たとえば、哲学者のP・ヤーニヒ教授は、生物多様性をめぐる倫理委員会で、従来の形態生物学者と遺伝子生物学者の「生物」の概念を巡る、討論が不可能なほどの激した対立を、的確な概念分析をとおして仲介し、議論が成立する地盤を構築する役割を果たしているとしています。哲学は諸学の基礎たりうるのであり、そうでなければなりません。
- ② 感性を基盤とする「情動コミュニケーション」の内実が知性を通して言語化され、明文化され、社会制度構築と改革の基準とされなければなりません。哲学者は「経験を言語化する」（メルロ＝ポンティ）役割を担い、一人称－二人称関係（我－汝－関係）の内実を言語による三人称的考察にもたらしうることで、我－汝－関係（純粹経験）が成立しうような社会制度の条件を確定しうるのでなければなりません。当事者の身体にあって表現されることを求める「心の痛み」を尊重し、「言葉になる」ときを待ち、それを手助けしつつ、それに立ち合う態度を一貫するということです。もちろんそのことは、自分の感性を言葉にする努力と直接つながっています。それが、感性と知性の全体として生活世界に生きる人間から出発する哲学考察の態度（フッサールのいう超越論的態度）なのです。